

灯火として耐え抜いた。

昭和二十一年十二月九日、東名古屋港に上陸して復員となった。

後日譚となるが、レイテ島のカバカンで勇戦奮闘して堀田少佐以下第三大隊の部隊が敵一中隊を全滅し多大の損害を与えて潰走せしめた戦闘ぶりに対して、敵である米軍の指揮者が讃辞をおしまなかつたことは特筆すべきことである。

鉄兵団バレテ峠の死闘

兵庫県 山下 正雄

―輜重輸卒が兵隊ならばトンボ、蝶々も鳥のうち、と輜重輸卒をやゆされた時代がありました。

そうです。私が入隊した昭和十三年のころまでは輜重輸卒は一人前の兵隊あつかいされませんでした。とくに私がここで申しあげたいのは、昭和十四年から輜重輸卒ではなくて輜重特務兵と呼ぶようになりましたし、一般

兵隊なみにも進級できることになりました。

―山下さんの軍歴のあら筋を教えてください。

私は昭和十三年徴集で第二種合格でした。昭和十三年十二月一日に第一補充兵として(教育召集で)姫路の輜重兵第十連隊に入隊しました。当時は鞍馬、駄馬による弾薬、糧秣、資材の輸送がおもな任務で、同年兵の多くは一か月の教育で召集解除になりましたが、残された者もありました。

私も残された組で翌年三月に教育召集が解除になり帰郷しました。なぜ残されたかといいますと、輜重隊も近い将来には軍用トラック等の自動車による輸送が多くなるというわけで、教育期間が三か月延びたわけです。

昭和十六年七月に関特演動員で二度目の召集を受け、満州のチャムスに行きました。私は昭和十九年七月までチャムスにおりました。捷号作戦発動にともない昭和十九年八月下旬から九月中旬にかけて台湾の基隆に上陸し、第十方面軍隷下にはいりました。師団は、兵庫、岡山、鳥取、の三県を徵募区とする部隊で、兵員の大部分が現役の下士官、兵で充足された。いわゆる「現役師団」

でありました。

昭和十九年十一月十日「第十師団を比島に派遣し、第十四方面軍（司令官、山下奉文大将）の隸下にはいらしめられる」ことになりました。師団は逐次、台湾高雄付近に集結して乗船を準備し、比島に向かうことになりました。私達は、はじめレイテ島に行くことになっておりましたが、レイテ島はすでに敵の手に落ち、諸隊は玉砕したということで、マニラに上陸しました。輜重隊は作戦上必要な軍需品や給与衛生に必要な軍需物資を、師団の諸隊に運搬するのが主たる任務ですが、バレット峠の激戦では自動車のハンドルを銃に持ちかえての激戦でした（師団長は輜重部隊まで第一線に注ぎこんでいました）。

—第十師団が捷号作戦発動により、昭和十九年八月から逐次比島に派遣されたのですが、全員無事に比島に移動できたのでしょうか。

私は師団先発部隊として歩兵第三十九連隊、搜索第一〇連隊、砲兵第一〇連隊第二大隊等は「有馬山丸」にて高雄出港、十二月十一日無事マニラに入港しました。この先発部隊はレイテ方面に向かい出港の予定であっ

たのですが、敵の大船団がスル海を北上しているのが発見されたのでマニラからバタオン半島に急進しました。

一方、師団主力の乗船した船団「三隻」乾瑞」「大威」「江の島丸」は十二月十八日台湾南部をはなれ、「江の島丸」はアバリ東方、「乾瑞」「大威」は北サンフェルナンドに向かいました。

同二十三日「江の島丸」（歩兵第一〇連隊主力）はアバリ東方カサブランカに到着。同日「大威」「乾瑞丸」は北サンフェルナンドに近づいたのですが入港を眼前にして「乾瑞丸」は到着やや前に敵の潜水艦の雷げきを受けて撃沈され、乗船部隊の約半数一千二百人の尊い人命と兵器弾薬の全部を失う悲運に遭遇しました。「大威丸」は北サンフェルナンドに到着しました。

海没部隊（「乾瑞丸」乗船部隊）は北サンフェルナンドにあって再建され、逐次追求したのであります。

—師団輜重におられたわけですが、輜重隊の任務からいえば当然のことながら、師団各隊がどこにいるか、戦況はどうなっているかをたえず頭のなかに置いておく必要があったと思います。

そうした陰の苦勞をお聞きしたいと思ひます。

第十師団（通称号「鉄」）は

部隊号

五四一	師団司令部	岡本保之中将
五四四六	歩兵三九連隊（姫路）	永吉大佐
五四四七	歩兵六三連隊（松江）	林 大佐
五四四八	歩兵一〇連隊（岡山）	岡山大佐
五四五〇	搜索第一〇連隊	鈴木少佐
五四五一	野砲第一〇連隊	多勢大佐
五四五二	工兵第一〇連隊	杉藤少佐
五四五三	師団通信隊	山下大尉
五四五四	輜重第一〇連隊	相沢少佐
五四五五	兵器勤務隊	村松大尉
五四五六	防疫給水部	大木少尉
五四五七―六〇	野戦病院	

そのほかに配属部隊が四個大隊、二個中隊がありま
した。

私達は主として野砲兵第一〇連隊の任務を担当しまし
た。

師団の各隊がフィリピンに安着出来ればよかったので
すが、「乾瑞丸」乗組みの部隊が撃沈されて兵員、武器
弾薬を失う悲運に遭遇したことは、なんといつても残念
このうえもないことですが、航行の途中に主力を離れて
「江の島丸」がアバリに上陸したり、また歩兵第三十九連
隊主力は師団長の指揮下を離れてバタアン半島に、歩兵
第十連隊はマニラから遠く北方六百キロの地点に上陸
し、残された師団唯一の歩兵六三連隊もマニラから二百
七十キロの北サンフェルナンドに上陸といった状況で、
師団諸隊がちりぢりバラバラになっています。ルソン島
防衛作戦は最初から困難さを思わせるものがあります。
—まったくその通りです。ルソン戦記を読みますと野
砲兵の活躍がめざましかったですように書かれています
すが、輜重隊のことについてはなにも書かれていま
せんが実際には野砲兵の活躍のかけには輜重隊のかけ
の力があつたと思うのですが、如何ですか。
私達がおもに任務を担当したのは野砲兵でした。野砲
兵（十五榴）ですが、その弾薬の搬送には輜重隊もずい
ぶん苦勞しました。

わかり易くいますと野砲兵が右にいますかと思つていたのが、いつの間にか左にいたり、あるいはその反対であつたりするのです。そのたびに弾薬をおろしたり積んだり、つまり、大砲は据えたけれども弾丸がないという状態がおこってしまうのです。野砲兵が陣地交換するたびに弾薬も移動せねばならないわけです。

また、弾頭は一発ごとに木箱に入れてあるわけですが、何回となく積みおろしているうちに箱がこわれて、ゴロゴロした弾頭を背に負って砲陣地まで搬送しました。背中にゴロゴロした弾頭を背負うのですから大変な苦勞です。トックリ結びが良いということが判つてきまして、巻きはんでトックリ結びにして弾頭を搬送しました。葉莖も運びました。火薬をどのようにして運んだのか全然記憶がありません。

なお師団が北サンフェルナンドからサンホセに移動したときも、軍需資材は全部輜重隊が搬送しました。軍馬は一般に暑さに弱く、すぐ倒れてしまうのでチャン馬(支那馬)を使用していました。また自動車隊はガソリン欠乏で軍用トラックが動かないので、臂力搬送する結果

にならざるをえません。輜重隊の勞苦といつても、とても口や筆では言いつくせるものではありません。

―バレット峠の死闘は今も語り草になっているのですが、輜重隊もこの時はトラックのハンドルを握る手に銃を取つて、第一線に出られた(搜索隊も第一線陣地についた)そうですが。

そのときのことを話して下さい。

第一大隊は輓馬、駄馬、第二大隊はトラック(大隊長米倉大尉)、私は米倉大隊所屬です。前述した通り戦闘の主力となる歩兵連隊が師団長の指揮下を離れたり、あるいは海没したりしています。おまけに輜重トラックといつても積載する軍需物資がないのですからトラックも無用の長物です。トラック大隊、米倉大隊(米倉大尉)(輜重第一〇連隊第二大隊)はトラックを後方にさげ、壕を掘つてトラックを格納したあと歩兵部隊に改組しました。

米倉大隊は各自小銃を所持しており、歩兵としての訓練も受けておりました。また高射機関銃の台座を改造(工作兵によつて)して平射機関銃となし、米倉大尉指揮

のもとバレテ峠の守備陣地につきました。他連隊の歩兵部隊はすでに壕を掘って陣地構築を終わっておりましたが、我が米倉大隊正面は壕を掘るいとまもなく敵の攻撃を受けました。

—敵の攻撃方法（戦法）はどんな方法であったのですか。

敵の攻撃はまず砲、迫撃砲の射撃を集中して圧倒したのち、戦車及び歩兵が協同して突撃前進をするが、わが生存者による銃撃を受けると前進を中止、さらに砲、迫撃射撃を反復したのち、攻撃前進を復興するので、陣地一帯の山容はまったく改まるといった状況でしたバレテを全將兵の死所と思ひ、陣地を各自の墓穴と覚悟しておりました。

そして昭和二十年四月一八日、ついに米倉大隊長も戦死しました。一月十五日バレテの陣地についてから約百日間の死闘でありました。

この陣地は馬の背陣地で両側の谷は深く、飲み水に乏しいので將兵は時に自らの尿まで飲んで戦ったのです。

米軍の戦史によると、当面の米第二十五師団長は三月

十五日師団の攻撃最重点として歩兵第二七連隊主力を以て妙高山（米倉大隊正面）からバレテ峠方面を攻撃するよう命じており、輜重兵第二大隊の將兵は、はからずも敵の攻撃最重点正面にあたることとなったのであります。

さらに特筆すべきことは、噴水のようにふりそぐ黄燐弾の飛沫になやまされました。この戦闘で五百人近くいた兵士も生存者僅か二十人という悲惨な戦闘でした。

—あとがき—

〔その一〕

元第十師団平林参謀の書いた戦記のなかに次のようなことが記されている。

『川を渡り谷を超え、断崖をよじのぼる。経路には、点々とたえることなく、屍がつづき、鬼気せまるものがある。バレテの戦場で勇敢に戦い、傷つき、生き残った勇士の最後であるだけに、その無念さを思えば、息もつまる思いであるが、かたて拝みの手さえあがらず目顔で冥福を祈るのみであった。』

また、密林の獣道にも似た経路の一点に、相当に古び

てはいるが一足の軍靴と巻きやはんがきちんとそろえて置かれている。

果たして持ち主と思われる兵隊は二〇メートルもはいった藪のなかで手榴弾で自決していた。

「俺はもう行けぬ、靴ときゃはんはくたびれてはいるがまだ使える。誰か俺の代わりにこれを使って頑張ってくれ」という心情が、痛いほど胸に迫った。当時、将兵は服も靴もボロボロといった状況であった。死の一瞬まで部隊と戦友に情をよせる優しい心が現役師団の強さの根源であった。

比島に無事上陸さえできれば現役師団の実力を遺憾なく発揮し、日米決戦の天王山に死を賭して戦い、国民の期待にこたえようとしたのだが、その意気込みが打ち砕かれ、将兵の落胆はかくせないものがあつた。』

〔その二〕

ある時期（昭和十三年頃まで）輜重輸卒は一般の兵隊からさげすまれ、一人前に扱われなかつた時期があつた。

昭和十四年頃から名称も輜重特務兵とかわり、一般兵

なみに進級も出来ることになった。

しかし山下氏にしてみれば、このことがよほどくやしかつたらしく、今回の聞き取り調査においても、繰り返し繰り返し私は輜重輸卒ではないのだということを発言されていた。

まして山下氏の所属されていた輜重第十連隊第二大隊（米倉大尉）はバレテ峠の激戦において自動車のハンドルを持つ手に銃をとって全滅に近い損害を受けながら、バレテ峠の正面第一線に撃って出たのである。

たたえてもたたえてもたたえ過ぎることはない。

船舶砲兵決死の対空対潜戦

兵庫県 倉本 寛次

「倉本さんは船舶砲兵だったと聞きましたが、船舶砲兵の方はたくさんいますね、貴重な体験が多いと思います。ですが、戦地はどこだったのですか。」

私は大正十年一月二十三日に生まれて、補充兵とし